

1 単元名 ことばの虫めがね ～ことばでクローズアップする表現～

2 授業構成

(1) 単元の価値と魅力

学習指導要領における「書くこと」の指導事項の中で、記述に関する事項の中学年では、「書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと」と示されている。3年生の児童の実態を考えたとき、この「書こうとすることの中心」をはっきりさせることが大変難しく、この課題を乗り越えられるかどうか、作文指導のひとつの山になっている。

まず、そもそも児童自身に「書きたい・伝えたい」という欲求がどれほどあるのかという問題が生じている。作文を書く活動や作文の宿題は、子どもたちにとってとても面倒くさいもののようだ。低学年では、短い文章でも「よく書けたね」と言われたが学年が上がるにつれて要求度も高くなり、子どもには作文に対する苦手意識も大きくなる。その結果、ある程度の文章量を稼ぐため、時間軸に従って自分の行動を表面的にだらだらと羅列する「したこと作文」が量産されることとなる。2年生までに学習した「順序よく書く」力を生かし、「はじめに」「次に」「最後に」と順序よく並列させて書くことはかなり上手だ。しかしこれは、「書こうとすることの中心」をはっきりさせることとは真逆の状態になってしまいうことが多い。では、どのような活動を工夫すれば、この状態を次の段階へと進めることができるのだろうか。

「伝えたいこと」について、私は「自分が伝えたいこと」でもあるが、「相手もこれを聞いたら喜ぶだろうこと」や「知ったら驚くだろうこと」と解釈している。そのような題材を選び、相手にわかってもらうために必要な情報や描写をくわえようとするのが相手意識だと考える。教師は、「書きたいことを詳しく書きなさい。」と指示するが、子どもたちは自分をきちんと賢く見せるために書いたり話したりしたいのではなく、相手に「へえ～、すごおい！おもしろ～い！」と驚いたり共感したりして欲しいのだと思う。そのためには、「きちんと伝えなければ正しく伝わらないことを確実に伝えようとする」ことが不可欠になる。そのために、一生懸命にことばを駆使して伝えたいような活動課題の設定が大切になる。

次に「書こうとすることの中心を明確にすること」を私は「場面の切り取り」と考えている。平均的な子どもたちの作文は、前述したように「したこと作文」が多く、「〇〇へ行きました。〇〇を食べました。次に、〇〇をしました。そこで、〇〇を食べました。最後に〇〇をしました。家に帰っておふろに入って寝ました。」のように、一日中、またはその行事の全体を羅列して書くことから抜けきれないでいる様子が見られた。丁度、ビデオカメラを回しっぱなしにしているように、ポイントが絞られていない。このような作文を「情報量が多く詳しい作文」と認識している児童もいる。しかし中には、中心を意識し、情景描写や心情を書くことのできる児童もあり、その作文は、写真のように中心となる対象物にピントが合っていて適度に周囲の情景もわかるように書かれている。この「(中心となることを意識して空間的・時間的に)場面を切り取る」という技能を習得するには、見たことを客観的にとらえ、表現するという力が必要だ。ただ、したことや見たことすべてを書くのではなく、場면을効果的に切り取り、情報を取捨選択して、相手を喜ばせたり驚かせたりするための「見たことをさらに自分でクローズアップする力」を鍛えることが大切になる。

そこで、年間を通して「ことばの虫めがね」という大単元を組み、いくつかのアプローチで表現する力を身につけ、表現を楽しむ児童を育ててきた。「ことばの虫めがね」の学習は、①話す・書くことのモチベーション設定②ことばトレーニングを通した語彙指導 ③集中単元での見たままを表現する技能の習得 の3つを柱にしている。

まず、①話す・書くことのモチベーション設定のためには、表現する題材を選ぶときに、びっくりしたこと、笑えること、ショックだったことなど自分の感情が大きくはっきりと動いた出来事という条件を意識させている。そのような話題について話しているとき、聞く側は目を輝かせて大きく反応しながら聞いており、話す側ももっと分かりやすく自分の心の動きや心を動かしたものの有り様を伝えようとする。作文であれば、他の児童に読めるように紹介する場を設定する。このような「受け入れられる（ウケる）」という体験はモチベーションを大きく高める。本単元「ことばでクローズアップ」においては、総合的な学習での湖山池の研究を題材に、プレゼンの原稿を作る活動を組み合わせている。湖山池を一周する際、湖山池のキャラクターであるこいけちゃんが湖山池に関わる様々なものを発見するという設定で写真を撮ったり文章を書いたりする。その作文は、2月に行う「実りの学校」と題する学習発表会でのプレゼン原稿のもととする計画だ。湖山池を見るこいけちゃんの気持ちになって文章を書くことで、さらにわかりやすく、おもしろく伝えたいという気持ちを高めることをねらっている。

②ことばトレーニングを通した語彙指導としては、定期的、または不定期に短時間で行えるワークシート活動を取り入れている。この中で、使える形容詞・形容動詞の語彙を増やしたり、比喩や慣用句を使うことに慣れたりする。また、集中してことばについて考えることで、ことばのおもしろさや豊かさに触れることができ、今後の言語感覚の成長の基礎となるだろう。

③集中単元での見たままを表現する技能の習得については、「ことばの虫めがね」における集中単元として後述のような活動を計画している。教科書教材として設定されている「書くこと」の単元にくわえて、自分の見たままを文章に表現する活動を重点的にを行い、そのもの・ことについてしっかりと思考し、ことばを選んで表現する力を身につけさせたい。そして、身に付けたことばの表現力を試し、さらに力を伸ばしたいという意欲につながられるよう、自分の表現力の伸びを実感できたり、友達と楽しみながら活動できたりするように学習課題を設定している。

（２） 学び合いを通して思考力・表現力を育成するために

学級の子どもたちに聞くと、「国語より算数が好き」という答えが多く返ってくる。国語が嫌いな理由を聞いてみると、その授業で自分が何を学んだかを自覚しにくい点、ことばを扱う方法を学んでもそれを次にどの場面で生かせるか想像しにくい点など、国語の学習の達成感の希薄さが感じられる。それと比較して、算数では、答えがはっきりしている分、できるようになったことが自覚でき、子どもたちの学習意欲を引き寄せているようだ。さらに、課題に向かって、こうかもしれない、これはちがった、と思考した結果が式や図、数字に表されてははっきりわかることが多い。では、国語における思考はどのようなだろう。国語で扱うことばというものは、日常生活に直結していて、「自分はもうほとんどわかっている」と思っている状態にある。ところが、ことばというものは人によって言語感覚に微妙に差があり、正しく理解し使用しようとするればかなり繊細に扱わなければならないものだ。だからこそ、何となくわかっているという事柄を、はっきりと論理的かつ客観的に説明するという思考の段階が要求される。そこに思考したのちの結果を自覚できる段階を加えると自分の学びを意識できるのではないかと考える。

国語科の学習には、大きく分けて「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」がある。どの内容も子どもたちのことばの力を高めていくために欠かせないが、特に中学年という客観性が芽生え始める時期に「書くこと」によって自分を外側から見ることは大変意義深いと考える。書くためにじっくりと思考することや書いたものを読み返すことは、自分を新たな角度から見つめ直すことにつながり、メタ認知の発達へとつながる。「書くこと」によって培われた思考力は、その他の言語活動にも十分発揮できるだろう。

本単元「ことばの虫めがね」では、これまでに写真や身のまわりの物などをじっくりと観察し、ことばを吟味しながら文章に表現していく活動に取り組んできた。形や大きさなどことばで表現しにくい事柄を「～のような」「～ぐらいの」など表現を工夫してことばに表しながら、児童はもっと的確なことばがあるのではないかと思考を深めてきている。また、ある程度量のある文章を書くことを通して、自分が見ているものの中で特に自分が興味をひかれ、他人に伝えたいと思う部分にポイントを絞って情報量

に差をつけていくこともできると考えている。本時においても、文章を書く活動には、比較しながらさらに自分の感性にぴったりのものを見つけていくという楽しさもあるということを、思考し続ける中で感じさせ、達成感へつなげたい。

また、本時の「ことばでクローズアップ」では、湖山池のキャラクターこいけちゃんから見た湖山池の景色を文章に書くことによって、ものの見方や文章の表現に客観性が生まれることをねらっている。自分の体験や記憶だけでなくこいけちゃんを目線で写した写真なども用いて、「自分が知っているから他人もわかるだろう」という主観的な見方から離れ、自分とは別のものになって書くことで今までとは違った思考力が芽生えたと考えている。作文を書く際に、その様子を知らない読み手でも文章を読むことによって様子が目に浮かぶという状態をめざせば、相手の知らないことと自分の知っていることとの違いを意識するようになるだろう。「くわしいかどうか」ということは自分側の感覚であることも多いが、「わかりやすいかどうか」ということは相手側からの評価であり、客観性へとつながる。

次に、学び合いという面から本単元の活動の価値を考えてみる。ことばで表現・理解するためには語彙の広さや傾向が大きく影響する。人は、その多くを周囲の人のことばから習得するため表現をより豊かにする過程では他人との活動、つまり協同的な学びの場が不可欠になる。しかし、3年生の児童の場合、たくさんのことばがすでに頭の中にインプットされているにもかかわらず、聞くと意味は分かるけれども、自分から思いついて使うことがなかなかできないという状況にある。感情を表すたくさんのことばを知っていても、作文やスピーチの終わりが判で押したように「楽しかったです。」で終わってしまうのはその一例だ。そのような状況を改善するために、子どもたちには、日頃の「ことばトレーニング」においても自分が思いついたことばの他に友達が思いついたことばを「それもあった、それもいいな。」と取り入れるようにさせている。自分のことばの引き出しの中が豊かになっていく楽しさを味わわせたいという意図もある。そこで本単元でも、それぞれの表現を出し合い、友達とことばを寄せ集めるような場面を設定し、友達の力を借りながら自分の語彙や表現をより確かで豊かなものにしていくことをねらう。そして、比較し合いながら徐々に高まっていく思考の過程を楽しみ、「様子がよくわかるように伝えられる文章が書けた。」という達成感、満足感を味わわせたい。そのために、同じ対象について書いた文章を持ち寄り、どの表現がよりその対象を分かりやすく伝えているか3～4人程度の少人数で話し合い、表現を練り上げる場面を設定する。同じ対象に関する表現の違いを比較することで協同的に学び、さらに思考を高め合わせたい。また、似ているが少しずつ違う場面の写真を対象として設定することで、それぞれのグループの描写の相違点にも気付かせ、様子をわかりやすく伝えることの価値や重要性を共に学ばせることができると考える。

本時の単元「ことばでクローズアップ」では、湖山池一周という共通体験に基づき、意見を出し合ったり補い合ったりすることができるようにしている。また、キャラクターこいけちゃんの視点という共通項があることから、思いを重ね合ったり比較したりしながら協同的な学びを織りなしていくことができると考えている。

3 単元目標

- 自分が選んだ場所について、実際に見た景色などをより適切なことばでわかりやすく書き表すことができる。

4 学習計画

(全3時間)

第1次 湖山池を一周した時の写真を見て、発見したことを友達と話し合う。(1)

第2次 自分が選んだ場面について、こいけちゃんを目線で作文を書く。(2)

第1時 写真と記憶をもとに、自分の書きたい場面について、こいけちゃんを目線で作文を書く。

第2時 写真を見て友達と意見を出し合い、よりわかりやすく、的確な表現に変えたり、書き加えたりする。

【本時】

5 本時の学習について

(1) 本時目標

○友達と意見を出し合い、よりわかりやすく、的確な表現に変えたり、書き加えたりすることができる。

(2) 準備 湖山池周辺の写真 カード 実物提示装置

(3) 本時の展開 (○教師の意図・支援 ◆個の探究への支援 ◇協同的な学びへの支援)

学 習 活 動	教師の意図・支援
1 いままで学習してきたことを思い出し、本時の学習のめあてを確認する。 「目に浮かぶような作文」の条件とは ◎書くための材料がたくさん集めてある。 ◎伝えたいことの中心がはっきりしている。 ◎よく見て、様子がわかることばを選んで使っている。	○読む人にもっと分かりやすく、情景が目に浮かぶような作文にするというめあてをはっきりさせて、友だちと表現の良さを見つけあおうとする意欲をもたせる。 ○学習発表会での発表原稿のもとになるということを想定して、より様子がよくわかるように書くための相手意識をもたせる。
こいけちゃんになって書いた湖山池の作文を、 友達と協力して「様子が目に浮かぶような」作文にかえよう。	
2 友達同士で、書いた文章を見合い、意見を出し合う。 ◎三津の石がま漁の跡・津生島 ◎つづらを城跡・昔の遊覧船・団子島 ◎青島・青島大橋・新しい遊覧船・猫島 ・話し合いの中で見つけたよい表現を、発表する。	◇出された表現を比較しやすいように、一文ずつ書いたカードを動かしながら話し合わせる。 ○「まるで～のように」「～ぐらい」などの比喩的表現や、的確な形容詞・形容動詞などに着目させたい。 ◇意見を出しやすいように、3，4人のグループを組ませる。 ◆写真をヒントにしながらより良い表現を見つけやすいようにする。
3 話し合ったことを参考にして、自分の書いた文章をさらにわかりやすくなるように直す。 ・わかりやすい文章表現には、赤線を引く。 ・前時に書いたものに赤字で書き加えたり、部分削除したりする。	○友達の表現の良さを取り入れたり、自分の表現の良さを客観的に評価したりして、文章表現をより豊かにする力を養う。 ◆文字や線の色を変えることで、よりよく変えている成果が目に見えるようにする。
4 直した文章を発表し、聞く側は発表された文章がどの写真をもとに表したものかを考えながら聞く。	○色、形など様子を表すわかりやすい表現を意識しながら、発表したり発表を聞いたりさせる。 ・文章表現のよかったところをその都度確認する。
5 本時に使うことができた良い表現を確認し、学習のまとめをする。	○本時で学んだことを意識させることによって、今後もよりわかりやすいことばで表現していこうという意欲につなげたい。

ことばの虫めがねとは・・・

この時期の子どもたちは、周囲の物事を見ているようで見えていないことも多いため、まだ自分が行動したことや自分の感情が中心となって心に残る。しかし文章を書くときには、読み手に伝えるために客観的な事実が必要になる。その客観的な事実の一つが「見たこと」だ。虫めがねによって、対象物を特定し、細かいところまでじっくりと観察するのと同じように、「ことばの虫めがね」という単元を通して「見たこと」に意識を集中させ、自分で問い続けながらことばを駆使して表現しようとする力の育成をねらっている。このような活動を通して、中学年期から育ち始める客観性の成長を促すこともできると考えている。単元の最後に「自分が見た自分の物語」を書くのは、その客観性の育ちを確かめるためでもある。このように、客観的な観察の目を加えながら文章を書くためのトレーニングを「ことばの虫めがね」と名付け、年間を通して国語科学習の中で体系的に学習することにした。

	「ことばの虫めがね（太字）」単元及び「書くこと」年間計画	ことばトレーニング (年間を通して)
4月	自分をしょうかいしよう 教科書教材 ○いろいろな観点で自分のことを振り返り、書くための材料を集める。	・ことばビンゴ (熟語みつけ)
5月	ことばでスケッチをしよう (「かんさつしたことを書こう」教科書教材) ○観察して気づいたことを、事柄ごとに整理して書く。	・〇〇しいパンダ (形容詞集め)
6月	ことばのレンズでじっくり見よう ○自分の持ち物や昆虫の写真などを見て形容詞や比喻を使って詳しく書き表す。	・〇〇のような・・・ (比喻の練習)
7月		・〇〇そうに・・・ (様子を表す)
9月	ことばでシャッターチャンス (「心に残ったことを書こう」教科書教材) ○伝えたいことの中心を考え、そのために必要な書く材料を選んで書く。	・ことばでスケッチ (見たままを書く)
10月	ことばでクローズアップ ○自分が実際に見た景色などを、よりわかりやすく、的確なことばで書き表す。	・ことばのたし算 (〇〇+まわる)
11月	研究レポートを書こう 教科書教材 ○知りたいことについて調べ、調べたことを整理して文章に書く。	・慣用句クイズ (手を〇〇〇)
12月	ことばの力を使おう～文集にのせたい作文を書く ○今までに学習したことを生かして、学校文集にのせる作文を書く。	
1月	くらべてわかったことを書こう 教科書教材 ○同じところと違うところを整理して文章を書く。	
2月		
3月	ことばの虫めがね 総集編 ○今までに学習したことを生かして、自分を主人公にした物語を書く。	